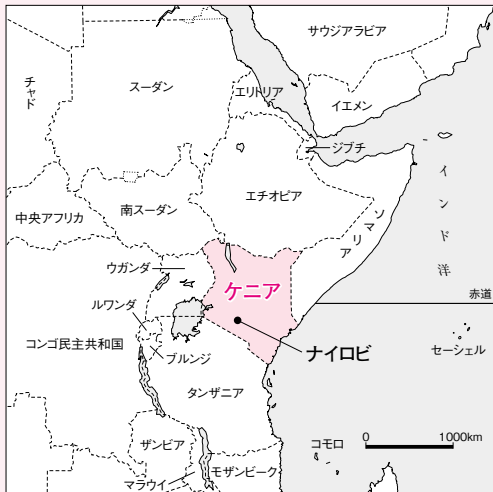


ナイロビの危険な人気者 マタトゥ

ナイロビ日本人学校 校長 平田博嗣



ナイロビとは、マサイ語で冷たい水という意味です。アフリカに進出した白人たちは、アフリカの暑さに閉口しましたが、ここナイロビならば住めると判断したとおり、たいへん過ごしやすい気候で、まさに冷たい水で一息ついた場所です。赤道直下(南緯1度)にもかかわらず、海拔1700m前後の高地のため、常春の陽気(15~25℃、湿度60%以下)で、日本でいえば、夏の高原のような感じ。夜に雨が降っても昼は晴天という、生き物にとってありがたい気候です。花は一年中咲き、



写真①

虫も動物も元気です。ナイロビは首都ですから、さすがに象やライオンが街中にいるわけではありませんが、街の南側は国立公園で道路からキリンを見ることができますし、近所のゴルフ場ではフェアウェーをシマウマが横切ります。

市の南側にあるナイロビ国立公園では、自分の車で公園内をドライブすることができます。やっぱりライオンを見るとケニアに来たと感じます。車の5m先であくびをしているライオンを見てつい車をとめました。ライオンは全世界共通で好かれているのか、現地の人も海外の人も寄ってきて、静かにじっと一緒にの時を過ごしました(写真①)。

ナイロビ日本人学校は、全校生徒40名の小さな学校です。小学生が32名、中学生は8名、教員は校長を入れて8名です。ですから運動会では校長もゴールのテープ係をするほど小さいですが、生徒・児童・先生も元気いっぱい。運動会では、現地校の生徒と二人三脚をしますが、現地の子には初めてなので戸惑っています(写真②)。学校にもわが家にもカメレオンがいます。カメレオンといってもいろいろ種類があります。育てている



写真②

のはジャクソンカメレオンといい、絶滅危惧種に指定されている種です。でも現地の人は悪魔の使いだともあまり好きではありません。「カメレオン!なんでそんなもの触っているんだ。」びっくりして、日本人は変わっているなという目をされます。

さてナイロビで生活をしていて、一番危険なのはマタトゥ(matatu)でしょう。マタトゥとは、ワンボックスカーを改良した小型バスのことです。このマタトゥの運転マナーの悪さは、最高(悪)です。急ブレーキ・急発進・急ハンドル、路肩や歩道を走り、反対車線をはみだしての走行、果ては逆走してくる車もあります。少しぐらいぶつかっても平気で走るため、街で事故があるとマタトゥがからんでいることがしばしばです。そのマタトゥのほとんどが日本車です(改造して定員は14人乗り)。ナイロビの道路には日本車が多いのですが、マタトゥに関していえば、そのほとんど全てが日本車で、走行距離何十万キロ、メーターが一回りして100万キロ以上のものもある輸入中

古車です。年式が古いので大量の黒い排気ガスをはいています。内装は日本仕様で車体に日本語で「〇〇屋」や「△△商事」と書いてあったりもします。日本人としては、ちょっと誇らしいようなくすぐったい感じがします。

マトトゥの歴史は、1963年のケニア独立当初からあったと考えられています。首都ナイロビには、地方から仕事を求めて多くの人々が流れ込み人口は急増しましたが、公共機関としての交通手段が整っていなかったため、自然発生的に生まれたと考えられています。当初は無認可で人を乗せて運賃を取ることを政府は規制していましたが、1973年初代大統領ケニヤッタはマトトゥを積極的に認め、折からのケニアの高度経済成長の波に乗って、街にはマトトゥがあふれかえるまでになり、庶民の足として成長したと思われています。マトトゥという名称は1963年当時、運賃が30セントで、スワヒリ語で「10セント3枚」をmapeni matatu (tatuは3の意味)といい、その最後の言葉だけが残ってマトトゥとなったとされています。現在ケニア国内だけでなく国境を越えアフリカ全土にマトトゥは走り回っています。今でこそ座席の数だけ乗客を乗せていますが、少し前までは乗れるだけ乗せるのがマトトゥの常識で、子どもは窓から出し入れされたようです。現在の料金は最低で30kshケニアシリング(40円)くらいです。同じ距離でタクシーを使うと10倍以上になるので、庶民はマトトゥを使用します。雨が降ると料金が2倍3倍となるため、乗せられるだけ乗せているようです。一応ボリスがくるとうまくかわしておとがめなし、臨機応変というわけです。ラッシュアワーの時なども値上がりはあたりまえです。マトトゥは基本的には運転手と集金係の二人で運営する個人経営です。集金係はマカンガと呼ばれ、おもしろいことをしゃべるエンターテナーであり客引きでもあります。停留所に何台かのマトトゥがとまっていると「こちらの方が早く出発するよ。こっちは速いぞ、こっちはもっとおもしろいぞ」と声をからしています。乗客がいっぱいになると出発するので歩行者をさくらにしたり、荷物を勝手に載せたりしている姿をよく見ます。しかし乗客たちもしっかりしていて、マカンガのトークも先刻承知で、おこりもせず、もっとおもしろい話



写真③

をしるとか、電話をかけるから音楽を小さくしろ等いろいろな要求を出しています。マカンガの席にも人を乗せた場合は、自分の席はありませんからスライド式の扉を開けたまま車につかまって大声をあげながら運転させています(写真③)。時々マカンガと運転手がケンカをしていたりすると、運転が荒くなったり、調子がいいと音楽をガンガン流して走ります。マトトゥには路線や停留所が一応ありますが、合図さえすればどこでも乗せてくれるし、降ろしてもくれます。そのために、急停車が頻繁に起こったり、歩道を走ったりすることもあります。今は基本的には車体に黄色い線を入れることになって、一応の規制がかかっていますが、かつては派手な色・装飾で、大音量で音楽を流して、マカンガがDJよろしく楽しく車内を活気づけていました。それをコンテストして人気を博したマトトゥは、マニャンガと呼ばれストリートの人気者となりました。マニャンガは今も存在しますが、規制がなかった昔はよかった、もっとおもしろかったと言う人たちはたくさんいて、熱狂的な支持層がいます。

無法者のマトトゥが走っているナイロビの道路はさぞたいへんだろうと考えられるかもしれませんが、慣れてくると、あまりクラクションも鳴らさず、道行く人たちも渋滞のなか、どんどん道を横切ります。混乱という秩序での生活スタイルがわかってきます。よく見ると交通渋滞の時、率先して交通整理に当たっているのはマトトゥの集金係のマカンガであったりします。マトトゥは最も危険ではありますが、やはり庶民の足としてナイロビでは生活に必要な不可欠な存在でもあります。道路をわが物顔で走り回るマトトゥは、道路の王様のようなのです。マトトゥは今日も元気にナイロビの街を走っています。